－所蔵作品紹介－

保田井　智之　HOTAI Tomoyuki

間の曖昧な地図

まのあいまいなちず

作品データはこちら

どこか聖職者を思わせるレリーフ状の人間像が二つ並んでいる。壁面に掛けられてはいるが空中に漂っているようにもみえる。超現実の世界の人なのであろうか、あるいは聖なる世界の人なのであろうか。右側の人物はパルプでできており、左側の木とブロンズでできた作品から型をとったものである。二点は互いに意味深く関連しあっていることが察せられる。

この作品の作者、保田井智之は昨年（2005年）第22回平櫛田中賞を受賞するなど、近年注目を集めている彫刻家である。1956（昭和31）年に宮崎県都城市に生まれ、1980年に武蔵野美術大学彫刻科を卒業。その後、個展やグループ展において今日まで一貫して木の人体彫刻を発表してきた。保田井の彫刻は初期の一木彫りから次第に個々のパーツを組み立てる制作法に移っていった。そして90年代初頭からは、骨組みをつくりそこに薄く細長い板を貼り流麗な人体を造形する技法に着手する。作者は塑像に近い表現を模索しているうちに造船技法を適用したこの制作手法を見出していったのである。人体は寸分の狂いもなく緻密に造形され、作者の高度な技法をみて取ることができる。

この作品もこうした技法を駆使して制作された近年の秀作である。ブロンズでできた頭部はやや下を向き黙想しているようである。流麗に造形された衣裳は格調の高さと厳粛さを感じさせる。またこの作品の外形は舟形をしていることから、ある意味では水面に漂流しているようにみえなくもない。作品の題名からもわかるようにこの人間像は「地図」を象徴的に示している。地上の空間世界に生きるのは人間であるということである。実像と虚像が対比されているようであるが、作者は中世の地図と現在の地図といったような対比からその機能や意味を問うているのである。掲載図版では壁面に並べて掛けられているが、程良い距離をとり二つが互いに向き合うように展示されるものとして作者は制作した。二つの「地図」の間に立つ鑑賞者の位置によってそれぞれをみる距離と方向が定まるという。作者は二つの「地図」をみる方向による認識の相異、さらには人間の知識の曖昧さを示そうとしているのである。この作品をはじめ、作者は物語性をたたえた神秘的で瞑想的な作品の数々を制作している。そこには作者の人間存在に対する深い思索が表現されているのである。

旭川美術館だより「氷華」No.47（2006.３発行）「収蔵作品から」より